エッセイ

世界へ 世界から

思いとかたち

柴崎 友香

大阪で暮らす若い女性がむかしの写真を集めて自分が住む街の過去を実感しようとする気持ちを『その街の今は』という小説に書いた。古い写真を使った絵はがきや戦後に写された空中写真などが小説のなかに出てくるが、それらの写真の大半は、大学で卒業論文を書くときに集めた資料がもとになっている。

わたしは大学で人文地理学を専攻していた。そう言うと、小説と関係ないのにどうして、意外ですね、なんて言われることが多いが、自分のなかではふたつのことはそんなに違わないというか、関心のありようという点では同じだ。卒業論文のテーマは「都市のイメージを写真によって分析する」ことで、『その街の今は』はその小説版だ、と自分では思っている。地理学だと階段を積み上げて着実にひとつひとつ上っていく感じ、小説ではときどきその段階を飛び越えるようなやり方ができるというふうに、あらわし方を変えてなんとか伝えようとしているのだと思う。

それからわたしの小説はいわゆる「大事件」が起こらなくて日常のできごとを題材にしていることが多い。それで、日常にこそドラマがあるんですね、と感想をいただくこともあるのだけれど、それも少し違う。電車で向かいに座る人を見ていても窓から外に広がる風景を見ていても、おもしろくてまったく飽きないのだが、その「おもしろい」というのは、特別変わったことを発見しているわけではない。

たとえるなら、昆虫や動物を見て「こっちのは羽根が長いけど、こっちには羽根が短いのがいる！」というような驚きに近いのではないかと思う。良いとか悪いとかではなく、違う、同じ、似てる、それだけでじゅうぶん驚異的だし、そこから考えることはいくらでもあって、好奇心は加速していく。

そういう性質なので当然、「みんぱく」は、寝袋を持ち込んで暮らしてもいいと思うほど好きな場所だ。最初に行ったのは何歳のときだったか覚えていないけれど、何度行っても、目が覚めるみたいに驚く。わたしにとってはテーマパークのアトラクションよりずっとわくわくするし、同時に、自分の家に帰ってきたように心が安らぐ。

それはきっと、みんぱくにあるものが、みんな人が作ったものだからだと思う。ひとつひとつ、誰か、それはわたしが会うことのない知らない人だけれど、その人の思考がその人の手によってかたちになってあらわれているからだろう。いつか、わたしが感じているこういう気持ちを小説のかたちにしたいと、長いあいだ考えている。

しばさき ともか／1973年大阪生まれ。小説家。2000年『きょうのできごと』（河出書房新社）でデビュー。2007年『その街の今は』（新潮社）で第57回芸術選奨文部科学大臣新人賞、第23回織田作之助賞受賞。著書に『青空感傷ツアー』『また会う日まで』（河出書房新社）『主題歌』（講談社）など多数。

月刊みんぱく

目次

AUGUST 2008
月刊みんぱく 8

01 エッセイ 世界へ世界から
思いとかたち
柴崎 友香

02 みんぱくインタビュー
景観をめぐる ふたつのフィールド
金田 章裕

08 モノ・グラフ
ムシロやゴザを織る道具
吉本 忍

10 地球ミュージアム紀行
砂漠のなかの グローバル楽器博物館
寺田 吉孝

11 表紙モノ語り
北西海岸のシルクスクリーン版画
岸上 伸啓

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
お犬様とEU加盟
新免 光比呂

15 時論・新論・理想論
ラテンアメリカの古写真を求めて
齋藤 晃

16 外国人として生きる
インドとのつながりを胸に
窪田 暁

18 歳時世相篇
⑤キャンプ イヌイットの夏の生活
岸上 伸啓

20 生きもの博物誌
博物館の いたずら虫たち②
和高 智美

22 フィールドで考える
「水上人」の幻影
長沼 さやか

24 みんぱく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ